

九大本『源氏大鏡』について：付、『源氏大鏡』三類本本文と校異（序・桐壺）

田坂, 憲二
福岡女子大学助教授

<https://doi.org/10.15017/10470>

出版情報：文献探究. 15, pp.20-26, 1985-02-25. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：

九大本『源氏大鏡』について

—付、『源氏大鏡』三類本本文と校異(序・桐壺)—

田坂憲二

『源氏物語』とのみ記される場合もあるため、未紹介の資料も少くないと思われる。

例えば、『思文閣古書資料目録』第百九号(昭和59年6月)16頁所載の『源氏物語歌合』は、その字真によると、内題に「光源氏一部詩並詞」と記されており、又、巻頭一葉のみを見る限りは、明らかに『源氏大鏡』一類本である。此の類のものは、ひかり存在するとみて間違いないであろう。

本稿では、未紹介資料の一として、九州大学文学部国文学研究室所蔵本をとりあげて、その紹介と若干の考察を行うものである。

二

まず九大本の書誌を簡略に記す。

整理番号「国文ノ17Fノ4」。帙入り、帙題簽には「源氏物語」と記す。大本(縦二六・八釐、横二〇・五釐)の袋綴。三卷三冊。装綴は原装か。表紙は栗色無紋表紙、本文料紙は楮紙。見返しは本文共紙。外題は、左肩に朱筆で「源氏(天地心)」と打ち付け書き、本えと同筆と思われる。内題なし。表紙見返しに、各冊所収の源語巻名を記す。一面十一・三行、一行二十字強、用字は漢字・平仮名。墨書による若干の書入れ、ミセケチがある。本文と同筆。和歌は改行せず、地の文に続けて書く。一部朱で合点を施す。書字年代は近世初中期か。

各冊の所収巻名及び丁数は以下の通り。

『源氏大鏡』の伝本研究は、昭和初期の藤田徳太郎氏・宮田和一郎氏によって尤鞭が付けられたが、その後、諸伝本を三類に分ける卓説が、稲賀敏三氏によって提示された(『源氏物語の研究』昭和42年、補訂版昭和58年)。同氏は、二十数本の伝本について調査を行い、一類本として十本、二類本として五本、三類本として六本を位置づけておられる。この三系統に分類する方法は、二類本については更に一次本・二次本と下位分類を行う必要はあるものの、大局的な把握としては極めて適切なものである。

従って、『源氏大鏡』の伝本研究において残された課題は、(一)未分類の伝写本の調査・未紹介資料の発掘、(二)各系統内における伝本の系譜確立・最有力量本の認定、であろう。(一)が(二)の調査と承けて行われるものであることは言うまでもない。そこで、当面(一)が急務となる。

伝本の存在は知られているものの、三系統の何れに属するか不明である写本は、稲賀氏前掲書に書名のみ示されるもの、『源氏物語事典』(東京堂)『国書総目録』等に記されているもの、約十五本が存する。これらの伝本の調査を行うと同時に、従来未紹介の写本を発掘していかねばならない。

『源氏大鏡』は、『浅間抄』・『浅間集』・『無妙抄』・『無外題』・『源氏歌詞』・『光源氏一部之歌並詞』等、様々な異称を持ち、又、

第一冊 序・桐壺―花散里 墨付七十丁、遊紙ナシ。
第二冊 須磨―藤裏葉 墨付七十七丁、遊紙ナシ。

第三冊 若菜上―夢浮橋 墨付七十六丁、遊紙ナシ。

蔵書印は「九州帝国大学図書印」のみ。昭和八年十二月五日の登録印が存する。上冊裏表紙見返しに、奈良・森島書店のラベルがあり、同店を経由して九大に入つたものか。

さて上述の如く、九大本には、どこにも『源氏大鏡』、『浅間抄』、『無外題』等の名は記されておらず、一貫して『源氏物語』そのものとして扱われてきたらしい。文学部、及び国文学研究室の図書カードにも『源氏物語』と記されている。猶、『国書総目録』の『源氏物語』の項には、九大に三冊本が蔵されている由であるが、当該本をさすのであろうか。勿論、『国書総目録』の『源氏大鏡』、『浅間抄』等の項に、九大本はあげられていない。

ところで、『源氏大鏡』が『源氏物語』として登録されたり、外題に記されたりすることは稀有ではない。京都大学・桃園文庫にこれぞれ一本ずつ同様の例があることが、宮田和一郎氏^(著)・大津有一氏^(著)によって報告されている。後者は未見であるが、前者については三類本系第二次本であることを述べたことがある^(著)。

さて、九大本であるが、その本文を檢すると、明らかに三類本と断ずることが出来る。『源氏大鏡』の伝本は、一類本に属するものが、私見によれば少くとも二十本と数えることができるのに比べて、二類本・三類本は半分以上の伝本しか存在していないようであり、九大本も無視できぬ一本といえよう。

三類本の写本は、稻賀氏によれば、①東北大学附属図書館蔵狩野文庫本『源氏無外題』 ②天理図書館蔵『源氏無外題』 ③天理図書館蔵宝玲文庫旧蔵『源氏大鏡』 ④島原松平文庫蔵『無外題 源氏鈔』 ⑤稻賀氏所蔵本がある。このうち、稻賀氏御所蔵本は未見だ

が、代つて ⑤九大本と ⑥天理図書館蔵『無妙抄』(三卷三冊)と三類本の伝本として加えたい。

三

次に、三類本諸本の中における九大本の位置づけを考えてみたい。猶以下において、必要に応じて左の略称を使用する。

- ① 東北大学狩野文庫本『源氏無外題』
- ② 天理図書館本『源氏無外題』
- ③ 天理図書館本『源氏大鏡』
- ④ 島原松平文庫本『無外題 源氏鈔』
- ⑤ 九大本『源氏物語』
- ⑥ 天理図書館本『無妙抄』

右六本と比較して、まず顕著であるのは、天理本『無妙抄』の独自脱文の多々である。

例えば、帚木巻、ひる食いの女の条。

まのあたりならずともさまへからんさうしはうけ給はらんと云に、返ことなにかいはれん、たうけ給ぬといひて罷り出けり(底本九大本、他本トノ校異ヲ示ス、但シ表記・仮名遣等ノ相異ハコレヲ略ス、以下同。①②③同、いはれん―④いはれん)

この箇所『無妙抄』のみは「なにをかいはれん、たうけ給ぬと」の部分と欠いている。

又、空蟬巻、源氏が再度紀伊守の邸を訪れた場面。

源氏を小君几帳のうちへ道ひき申たり、やきうふるまひなし給へとも、御その音なひいとしく、空蟬いとく聞つけて、かほとまたけてみれば、几帳のうちへいり給ふに、せんかたなく

て……(狩野大鏡同)

この箇所「無妙抄」のみは、「道ひき申たり」凡帳のうちへ」の部分、約六十字分を欠く。

今一例、夕顔巻、某院にて物怪におそわれた場面。

いとかよはくて、ひるもそらそのみ見つるものとおほすに、せんかたなし、かろうしてしそくかたるに(狩野大鏡同) おほす

—(狩野大鏡) おほす、しそく—(無妙抄) おほす

この箇所「無妙抄」は「空室のみ」かろうして」の部分と欠く。

此様な箇所は、かなり多数存在しており、「無妙抄」を単独で、三類本の代表的・標準的な本文として使用することは不適切といふべきであらう。

次に、狩野文庫本も、若干の独自脱文を有する。一例をあげると、若葉巻で源氏が茶の上を二条院へ伴う場面、三類本諸本には存する「御めのとも茶の君もとりあへすうつろひ給へり」の一えと、狩野文庫本は欠く。又、狩野文庫本は、小規模ながら独自異文が多数存する。例えば、夕顔巻の某の院の場面、諸本「此人いかになりぬる」とおほす」とある部分、狩野文庫本のみ「此人いかになりぬる」とあましけれとも」とある。前述の、「無妙抄」の独自脱文の項にあげた三例でも、そのうち二例には狩野文庫本のみが若干の独自異文を持っていたのである。此様に狩野文庫本は、他の三類本諸本とは、やや遠い関係にあると思われる。

しかし、何といつても、狩野文庫本の最大の特徴は、「源氏大鏡」に特有の河内本・別本に近い本文と、青表紙本系に近い形に、かなり改められている点である。以下、数例をあげる。

夕顔巻々末近く、空輝より源氏への贈歌。

とはぬともなとかとはてや程ふるにいかはかりかと思ひわつらふ(底本九大本、なとかとはてや—(狩野大鏡) なとかとはて、(大)

とかとはて、(大) なとかとはて、(大) なとかとはて、(大)

とはぬともなとかとはてはとふるにいかはかりかと思ひわつらふ(狩野文庫本)

第二句に諸本若干の異同があるが、第五句は諸本全て「思ひわつらふ」であるのに、狩野文庫本のみが「みたまる」に訂してある。

「源氏大鏡」一・二類本の大部分の本文も「わつらふ」であり、これは河内本の本文でもあるのだが、狩野文庫本は、これを青表紙本の形へと改めている。此様な例は、和歌の部分においては数多く見出せるが、地の文においても散見する。

末摘花巻々頭近く、源氏が初めて末摘花の琴を立聞きする場面、三類本諸本は何れも「八月十六日いさよひの月さしいてたるに」とあるのだが、狩野文庫本のみ「八月十六日」の部分とミセケチにする。これは源語本文に即して考えれば、季節は春であるから、狩野文庫本の形の方が正しいということになる。しかし、「源氏大鏡」諸本は、何故か一・二類本ともに「八月十六日」と記されており、これが「源氏大鏡」本来の形であったと思われる。

同じく末摘花巻、冬、源氏が常陸宮邸を訪れた場面、三類本諸本「松の木のをのれとをさかへりてさとこほるも、夜こそ末の、と見ゆ」とある箇所で、狩野文庫本のみ「なみこす末」と記される。ここでも、河内本・別本系の「なみこす」が、青表紙本系の「名にたつ」と改められているのである。

従って、狩野文庫本を三類本として使用する場合、極めて慎重な対応が必要である。ミセケチの箇所が、転写の際の誤りを訂正したものであるのか(此の例も少からず存する)、青表紙本系統の本文によって改めたものであるのかと、厳密に区別した上で使用しなければならぬと思われる。

残る四写本のうち、松平文庫本は上冊のみ、花散里巻迄の残存本

であり(又、松平文庫本には誤写も比較的多い)、天理本『源氏大鏡』は、第三冊(須磨―朝籠)を欠く残欠本であるから、結局九大本と天理本『無外題』が残ることになる。九大本には若干の脱文もあり、又、書写年代も天理本『源氏無外題』の方が室町末期頃と古いから、天理本『無外題』を底本とし、九大本を対校資料として用いるのが、現時点では、三類本の最も標準的な本文を得る方法であると思われる。

此様に九大本は、比較的兎本の少い『源氏大鏡』三類本において重要な意味を持つ資料と考えられるのである。

注

- (1) 「源氏物語梗概書目解題」「同補遺」(『国文教育』昭2・10。昭3・1。)
- (2) 「源氏物語古鈔の一考察(二)(三)」(『国語国文の研究』昭3・11〜4・3。)
- (3) 稻賀氏は更に「三類以外の諸本でありながら密接な関係を持つもの」と、総合的に四類として扱われているが、これは本稿の考察の対象からは除く。
- (4) 拙稿「京都大学本『源氏大鏡』について」『源氏大鏡』三類本二次本考(『文芸と思想』四九号。昭60・2刊行予定)
- (5) 注(2)論文。
- (6) 『源氏物語事典』下巻「注釈書解題」
- (7) 注(4)拙稿。
- (8) 例えば、帝本巻「そのほらやふせやにおふる梯木のありとは見えてあはぬ君かな」の引歌を欠く。
- (9) 『天理図書館稀書目録 和漢書之部第三』

付 『源氏大鏡』三類本文と校異(序・桐壺)

『源氏大鏡』のうち、一・二類本については、既に影印・翻刻が存する。即ち、一類本では、黒川本が『ノートルダム清心女子大学古典叢書』に収められ、二類本系一次本では吉田幸一氏所蔵『源氏物語抜書抄』が『古典文庫』に、同系二次本では、細川文庫本が『在九州国文資料影印叢書』第二期に、それぞれ収められている。

対して三類本では、未だ此様な形のものはない。そこで、未刊の三類本の一として、九大本を翻刻し、狩野文庫本『源氏無外題』天理本『源氏無外題』同『源氏大鏡』同『無妙抄』島原松平文庫本『無外題源氏鈔』との校異を掲げる。猶、紙面の都合もあり、序と桐壺巻に限り、校異も、表記・仮名遣・ミセケテの相異についてはこれを略す。

光源氏物語のおこりは、おほさいるん① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿ ㉿ ㊰ ㊱ ㊲ ㊳

にもわかむらてきの巻を優艶に作り出したればとて、其名を式部とめされけるなり、但つくりたるころは、業平の「へま」中將門保親王の御子、母伊登内親王、その品たくひなし、又かたちきよけにやまと哥たへなりし事をおもひて、光源氏の君とつくり出せり、かの業平のふるまひ、二条五条の二人の後に忍びて参りしによそへて、源氏に薄雲の女院龍月夜の内侍などあらはせり、是のみならず情をかはしちきりをむすぶ、そのくよせことなるへし、有説、西の宮の左大臣たかあきは醍醐の御門の御子にて一世の源氏なり、みめかたち人にすぐれ詩并管絃にくらからりしを源氏といひ、我心にしめ奉るによりて策の上を式部か名によせてかけり、彼たかあき、たさいのきつにうつしてつくしへおもむきし事、書出せるに「ウ」あらずといへり、又さりたなくて大やけわたくしにつけて人の心をつけ、やまともろこしをかねてもの、情をしらしむ、凡五十四帖の内に君も臣も身をあはせぬる、をのせたり、然は管絃の道詩哥のおもむき、時に「つ」けてさとうらしめものによせてをし「す」と云事なし、詞は春の花の木々の梢に匂ひとのこし、心は秋の月の千里の外までもくまなるへし、よく心をえてよみもてなさは神佛も恵み給ふへし、まことに石山の観音の御りしやうならずは此事に思ひよらしといひつたへたり「2オ」

桐壺

きりつほは五舎の其一なり、しけいさといふも桐壺也、五舎とは梅つほ、なしつほ、藤つほ、きりつほ、かんりりのつほの事也、太上

- (1) 松ナシ
- (2) 松ナシ
- (3) 松ナシ
- (4) 松ナシ
- (5) 松ナシ
- (6) 松ナシ
- (7) 松ナシ
- (8) 松ナシ
- (9) 松ナシ
- (10) 松ナシ
- (11) 松ナシ
- (12) 松ナシ
- (13) 松ナシ
- (14) 松ナシ
- (15) 松ナシ
- (16) 松ナシ
- (17) 松ナシ
- (18) 松ナシ
- (19) 松ナシ
- (20) 松ナシ
- (21) 松ナシ
- (22) 松ナシ
- (23) 松ナシ
- (24) 松ナシ
- (25) 松ナシ
- (26) 松ナシ
- (27) 松ナシ
- (28) 松ナシ
- (29) 松ナシ
- (30) 松ナシ
- (31) 松ナシ
- (32) 松ナシ
- (33) 松ナシ
- (34) 松ナシ
- (35) 松ナシ
- (36) 松ナシ
- (37) 松ナシ
- (38) 松ナシ
- (39) 松ナシ
- (40) 松ナシ
- (41) 松ナシ
- (42) 松ナシ
- (43) 松ナシ
- (44) 松ナシ
- (45) 松ナシ
- (46) 松ナシ
- (47) 松ナシ
- (48) 松ナシ
- (49) 松ナシ
- (50) 松ナシ
- (51) 松ナシ
- (52) 松ナシ
- (53) 松ナシ
- (54) 松ナシ
- (55) 松ナシ
- (56) 松ナシ
- (57) 松ナシ
- (58) 松ナシ
- (59) 松ナシ
- (60) 松ナシ
- (61) 松ナシ
- (62) 松ナシ
- (63) 松ナシ
- (64) 松ナシ
- (65) 松ナシ
- (66) 松ナシ
- (67) 松ナシ
- (68) 松ナシ
- (69) 松ナシ
- (70) 松ナシ
- (71) 松ナシ
- (72) 松ナシ
- (73) 松ナシ
- (74) 松ナシ
- (75) 松ナシ
- (76) 松ナシ
- (77) 松ナシ
- (78) 松ナシ
- (79) 松ナシ
- (80) 松ナシ
- (81) 松ナシ
- (82) 松ナシ
- (83) 松ナシ
- (84) 松ナシ
- (85) 松ナシ
- (86) 松ナシ
- (87) 松ナシ
- (88) 松ナシ
- (89) 松ナシ
- (90) 松ナシ
- (91) 松ナシ
- (92) 松ナシ
- (93) 松ナシ
- (94) 松ナシ
- (95) 松ナシ
- (96) 松ナシ
- (97) 松ナシ
- (98) 松ナシ
- (99) 松ナシ
- (100) 松ナシ

天王をもちつれ御時にかといへり、この御門に女御更衣あまたさぶらひたまふ中に、やんことなきはにはあらぬかすくれて時のたまふありけりといふは、光源氏の御母なり、此更衣桐壺に住給ふ、一の巻には此人の事をのみ沙汰したれば桐壺と名付、太上天王をも桐壺の御門と申也、みこたちといふは王子也、上達部とは公卿也、うへ人とは殿上人也、后とは一人おはします、后の中宮と申也、女御は三位、更衣は四位、いづれもいくたりもまします、命婦采女蔵人等の出仕申所を大はん所といふ、女房のさぶらひ也、た、さぶらひとは殿上也、一の御子は右大臣の女御、こうきてんの御はら、これをきりつほの巻にまうけの君といへり、いづれも此次の御門になり給ふへきは春宮、まうけの君と申也、右大臣の女御の御はらに女みや二所まします、女一の宮女三の宮と申す、其次に桐壺の御腹、世にたくひなき玉のおのこむまれ給ぬと本にあるは、光源氏の御事也、三歳にて御はかまきあり、おなしとしの夏、母更衣はかなき心ちになつらひて内裏をまかてなんとしたまふと、御門「ウ」ゆるしかたくおほしまとふ、いとむひやかにうつくしき人のいたうおもやせてまみなともたゆけ也、てくるまのせんしなどのたまひても又いらせたまひて、さらに御なみたひまなし、かきりあらんみちにもまきれきた、しとこそちまらせ給ひけるに、さりとともうちすて、はえゆきやらしとなくくのたまへは、更衣

- (1) 諸本、いづれの
- (2) 申も同(本文化)
- (3) は
- (4) 桐壺の更衣
- (5) 大内
- (6) 神といふは
- (7) 松ナシ
- (8) 松ナシ
- (9) 松ナシ
- (10) 松ナシ
- (11) 松ナシ
- (12) 松ナシ
- (13) 松ナシ
- (14) 松ナシ
- (15) 松ナシ
- (16) 松ナシ
- (17) 松ナシ
- (18) 松ナシ
- (19) 松ナシ
- (20) 松ナシ
- (21) 松ナシ
- (22) 松ナシ
- (23) 松ナシ
- (24) 松ナシ
- (25) 松ナシ
- (26) 松ナシ
- (27) 松ナシ
- (28) 松ナシ
- (29) 松ナシ
- (30) 松ナシ
- (31) 松ナシ
- (32) 松ナシ
- (33) 松ナシ
- (34) 松ナシ
- (35) 松ナシ
- (36) 松ナシ
- (37) 松ナシ
- (38) 松ナシ
- (39) 松ナシ
- (40) 松ナシ
- (41) 松ナシ
- (42) 松ナシ
- (43) 松ナシ
- (44) 松ナシ
- (45) 松ナシ
- (46) 松ナシ
- (47) 松ナシ
- (48) 松ナシ
- (49) 松ナシ
- (50) 松ナシ
- (51) 松ナシ
- (52) 松ナシ
- (53) 松ナシ
- (54) 松ナシ
- (55) 松ナシ
- (56) 松ナシ
- (57) 松ナシ
- (58) 松ナシ
- (59) 松ナシ
- (60) 松ナシ
- (61) 松ナシ
- (62) 松ナシ
- (63) 松ナシ
- (64) 松ナシ
- (65) 松ナシ
- (66) 松ナシ
- (67) 松ナシ
- (68) 松ナシ
- (69) 松ナシ
- (70) 松ナシ
- (71) 松ナシ
- (72) 松ナシ
- (73) 松ナシ
- (74) 松ナシ
- (75) 松ナシ
- (76) 松ナシ
- (77) 松ナシ
- (78) 松ナシ
- (79) 松ナシ
- (80) 松ナシ
- (81) 松ナシ
- (82) 松ナシ
- (83) 松ナシ
- (84) 松ナシ
- (85) 松ナシ
- (86) 松ナシ
- (87) 松ナシ
- (88) 松ナシ
- (89) 松ナシ
- (90) 松ナシ
- (91) 松ナシ
- (92) 松ナシ
- (93) 松ナシ
- (94) 松ナシ
- (95) 松ナシ
- (96) 松ナシ
- (97) 松ナシ
- (98) 松ナシ
- (99) 松ナシ
- (100) 松ナシ

③ 限りとしてわかる、みちのかなしきにかまほしきはいのちなりけり
 きこえまほしきなること葉おほれども、いさまたえつ
 あるかなまかのさまなれはまかてさせ給ぬ、御門御むねふたかり
 て、あかしかねさせ給ふ、御つかひのゆきかふほともおほつかなく
 (4オ) おほしめすに、夜なかはかりにたえはてぬと申、何事もおほ
 しめれわかれすこもりおほします、日かすぶるまゝにせんかたなく
 恋しくおほさるれば、かたへの女御更衣の御とのるも絶はて、よ
 るひる涙にひちてあかしくらし給ふ、風野分たちてはたさむきたく
 れのほど、つねよりもおほしいつる事おほくて、夕月よのおかしき
 ほとに若宮の御かたへ御つかひあり、此もかたりに人のかたちを
 も月花をも上品なまをおかしといふ也、更衣の母北の方へ御門の御
 文あり、御使はゆけいの命婦といふ女房也、御門、宮城野の露吹詰
 風、風の音に小萩かもとと思ひこそやれ、かたへの人(4オ) のそね
 みねたみ給し事あり、諸人と書てかたへの人とよむ也、おとしめ給
 ふとはみおとさんとする事也、きつとともむる、引哥、直木にま
 かれる校もあるものをけとぶき疵をいふかわりなき、御使の命婦か
 しにまかてつきてみるに、草もたかくなり野分にいとあれたる
 心地して、月影はかりそ八重むくらにもさはらすといふ、引哥、八
 重むくらしければ宿のさひしきに人こそ見えね秋は采にけれ、御つ
 かひかへりなんとするほどに、風すしうむしの音もあはれもよほ
 しかほなれば、命婦、すむしのこゑの限を尽しても長きよあかす
 ふる泪哉、母北の方(4オ) いとしくむしのねしけきあてらふに

- (23) 御門は
- (24) 御門は
- (25) 御門は
- (26) 御門は
- (27) 御門は
- (28) 御門は
- (29) 御門は
- (30) 御門は
- (31) 御門は
- (32) 御門は
- (33) 御門は
- (34) 御門は
- (35) 御門は
- (36) 御門は
- (37) 御門は
- (38) 御門は
- (39) 御門は
- (40) 御門は
- (41) 御門は
- (42) 御門は
- (43) 御門は
- (44) 御門は
- (45) 御門は
- (46) 御門は
- (47) 御門は
- (48) 御門は
- (49) 御門は
- (50) 御門は
- (51) 御門は
- (52) 御門は
- (53) 御門は
- (54) 御門は
- (55) 御門は
- (56) 御門は
- (57) 御門は
- (58) 御門は
- (59) 御門は
- (60) 御門は
- (61) 御門は
- (62) 御門は
- (63) 御門は
- (64) 御門は
- (65) 御門は
- (66) 御門は
- (67) 御門は
- (68) 御門は
- (69) 御門は
- (70) 御門は
- (71) 御門は
- (72) 御門は
- (73) 御門は
- (74) 御門は
- (75) 御門は
- (76) 御門は
- (77) 御門は
- (78) 御門は
- (79) 御門は
- (80) 御門は
- (81) 御門は
- (82) 御門は
- (83) 御門は
- (84) 御門は
- (85) 御門は
- (86) 御門は
- (87) 御門は
- (88) 御門は
- (89) 御門は
- (90) 御門は
- (91) 御門は
- (92) 御門は
- (93) 御門は
- (94) 御門は
- (95) 御門は
- (96) 御門は
- (97) 御門は
- (98) 御門は
- (99) 御門は
- (100) 御門は

霞置そふる雲のうへ人、母北の方、命婦のすのつらきとて松のおも
 はんとある、引哥、いかにしてありとしられたかさこの松のおも
 はん事もはつかし、御使かしこの有さましのひやかにそうして、母
 北のかたへ御返したてまつる、あらし風ふせきしかけのかれしより
 こ萩かうへそしつ心なき、かの更衣の御くしあけのてうとやう・物
 を、御使にをくり物にいたされたり、御門に御覽せざるれば、なき
 人のありかたつね出たりけんしるしのかんさしならましかはと、お
 ほしめさるもかひなし、尋行まほろしも(4ウ) かなつてにても玉
 のありかてこそとしるへく、かやうの事はみなもろこしの楊貴妃の
 事を引たり、はねきならへ枝とかはさんとちまらせ給ひしに、かな
 はさりける命の程そつきせすうらめしくおほしける、ていしの御門
 の御みつから長恨歌の絵をかへせたまひて、伊勢貴之に再とよませ
 給しなとこそ、此頃は枕ことにさせ給ひける、枕ことは、つねの
 ことくさなといへる同事也、楊貴妃のかたちの花やかさは、たいえ
 きのふやう、ひやうのやなきに似たり、ふやうは蓮也、長恨歌には
 かやうにつくりたれとも、筆かきりあれば白ひ(6オ) すくなし、
 此更衣のかたらはたとへんかたなしとなり、らうたけになつかしか
 りしけはひかたらの、面影にそひておほさる(7オ) やみのう
 つにはをとりたま、引哥、むは玉のやみのうつはさたかなま夢
 にいくらもまさらさりけり、太上天皇、雲のうへもなみたにくる、
 秋の月いかてすむらんあさちふの宿、此みやす所とかたへの女房も

- (38) 御門は
- (39) 御門は
- (40) 御門は
- (41) 御門は
- (42) 御門は
- (43) 御門は
- (44) 御門は
- (45) 御門は
- (46) 御門は
- (47) 御門は
- (48) 御門は
- (49) 御門は
- (50) 御門は
- (51) 御門は
- (52) 御門は
- (53) 御門は
- (54) 御門は
- (55) 御門は
- (56) 御門は
- (57) 御門は
- (58) 御門は
- (59) 御門は
- (60) 御門は
- (61) 御門は
- (62) 御門は
- (63) 御門は
- (64) 御門は
- (65) 御門は
- (66) 御門は
- (67) 御門は
- (68) 御門は
- (69) 御門は
- (70) 御門は
- (71) 御門は
- (72) 御門は
- (73) 御門は
- (74) 御門は
- (75) 御門は
- (76) 御門は
- (77) 御門は
- (78) 御門は
- (79) 御門は
- (80) 御門は
- (81) 御門は
- (82) 御門は
- (83) 御門は
- (84) 御門は
- (85) 御門は
- (86) 御門は
- (87) 御門は
- (88) 御門は
- (89) 御門は
- (90) 御門は
- (91) 御門は
- (92) 御門は
- (93) 御門は
- (94) 御門は
- (95) 御門は
- (96) 御門は
- (97) 御門は
- (98) 御門は
- (99) 御門は
- (100) 御門は

